

〔論文〕

# 日常保育場面における幼児間の会話の発達的特徴

山 本 弥栄子

Yaeko Yamamoto

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

2歳後半から6歳前半の保育所児の設定場面、食事場面、着替え場面、午睡場面、おやつ場面、自由遊び場面に筆者が参加観察し収集した逐語記録230エピソードの会話について、ターン数、会話開始の発話機能の種類、会話の共有情報内容について分析し、幼児間の会話の発達的特徴を明らかにした。ターン数2の応答型、眼前の事物を共有情報とする会話は2,3歳に多く、ターン数3以上の発話交替、眼前にないイメージを共有情報とする会話は4歳以降の群で多かった。会話開始時の発話では、2,3歳群では「命令」が多くみられ、4歳群では「陳述」が多かった。4歳以降に、幼児間での会話が成立してくることが示された。

キーワード：幼児間の会話、ターン、会話の共有情報、会話の開始発話

## I 問題

日常の保育場面では常に子ども同士が会話をしており、話題を交互に出し合い共同で話題をつくりだしている。幼少期の子ども同士は相互伝達の未熟な時期であるが、就学前までの間に徐々に相手の発話に対し、内容として適応的である会話が成立していくといえる。幼児間の会話の発達を研究する視点から、会話の維持はターンの維持によって成り立ち、なおかつ会話が維持されるには開始発話の機能が重要な要素であると考えられる。

会話におけるターン継続の視点でみると、遊び場面で適切な応答を得る割合は3歳半～4歳後半の年長群(84%)の方が2歳前半～3歳半の年少群(68%)より高くなる(江口, 1974)ことから、4歳頃には相手の話しかけに関連した発話での応答が可能となり、子ども同士での会話が維持されることが考えられる。

会話開始時の発話では、陳述に始まる発話連鎖に関連した発話が引き続くターン数2以上(発話者→反応(返答)→反応(返答)以上のやりとり)の長い発話連鎖が4歳以上に増加する(深田・倉盛・小坂・石井・横山, 1999)。隣接ペア(Schegloff & Sacks, 1973)では、各ターンによって為される行為の型として、第一部分が生成されるとその後特定型の第二部分が適切となる。また、マイクロカウンセリング法(福原・Ivey, A. E.・Ivey, M. B., 2004)で使用される「閉じた質問」では、応答内容が限定され、「開かれた質問」では自由度のあ

る応答が期待できるなど、先行発話が会話の維持に大きく影響を及ぼすことが考えられる。

会話の共有情報として、Halliday (1985/2001) は、発話の役割を話し手が聞き手に何かを与えている「供与(giving)」と、聞き手に何かを要求している「要求(demand)」の二つに分類し、交換されるものとして「事物/行為」と「情報」を挙げた。発話の役割として「要求」と「供与」、交換されるものとしての「事物/行為」と「情報」の交差関係によってメッセージの交換が行なわれていることを説明した。交換されるものが「事物」か「情報」か、という観点から統制された積み木の共有場面での2歳と4歳群の子ども同士の会話を分析した筆者(2023)は、年齢が上がるにつれ、会話の共有情報は事物から情報(イメージ)に発展していくこと、主に4歳以降にイメージを出し合うことで会話を成立させていることを明らかにした。

日常場面において大人の活動に自ら参加し、家事を手伝う姿(例: 食器をテーブルに並べる)が18か月から24か月の子どもにみられるように(Rheingold, 1982)、会話の場面や目的に相応しい内容の発言や行動をしようとする「協調の原理」(Grice, 1975)にもとづいた会話での協力も、2歳前にみられ始める(Garvey, 1984/1987)。

また、2歳前半から後半にかけて、幼児の会話は大きく発達を遂げ、大人の介入が無くとも、ある程度、幼児相互間において言語伝達しあえるほどの技能を獲得することも指摘されている(江口, 1974)。2歳後半になると、「何食べたの?」というような特定質問に対して求められている情報を付加して応じたり、実験者の発話を否定するなど異なった対処方略をとるように、相手の状

態に応じて伝達内容や伝達の仕方を調整することが可能になる（木下，2002）。2歳後半頃には、相手の発話をモニターすることにより、相手が必要としている内容に適応した情報を把握し始めている。

## II 本研究の目的

本研究では、足場かけのない子ども同士の会話に着目する。日常の保育場面は、さまざまであり、統制された場面よりも自由度が高く、多様な目的によって会話が為されると考えられる。筆者（2023）で、2歳児、4歳児の積み木共有の実験場面での会話の発達をあきらかにした。本研究では、日常場面においても会話の質的变化が検証されるかについて、特に2, 3歳群と4歳以降の年齢群での違いを検討する。その際、会話の維持をターン数で測定し、会話の共有情報の種類の変化と会話開始時の発話の種類の変化を量的分析でみることに加え、エピソードによりその内容を明らかにする。

## III 方法

### 1. 観察期間と観察対象児

20X0年から20X5年の5年間、K市私立K保育園で2歳児クラスから5歳児クラスで参加観察を行なった。

観察対象児数は、2歳後半児が19名、3歳前半児が6名、3歳後半児が20名、4歳前半児が25名、4歳後半児が9名、5歳前半児が11名、5歳後半児が19名、6歳前半児が14名の延べ123名（実人数は94名）であった。月齢分類は、0か月から5か月までを前半児、6か月から11か月までを後半児とした。

### 2. 観察手続き

幼児の自発的な発話が観察できるよう幼児とのラポールを図るために、観察は2－3日連続で、午前9時30分から午後5時30分まで行なった。筆者（観察者）はこの観察期間の前年度から土曜日保育や夜間のクラス保護者会などの保育補助に入っていた。事象記録法により、幼児が自発的に同輩間で話し始め、一連の会話の流れが終わったと判断した時点まで、その場でフィールドノートに逐語記録した。また、年長児では多量の発話数が予測されたため、幼児間の自発的な会話がみられた時、観察者が衣服のポケットに携帯保持した音声レコーダーに録音した。なお、観察した幼児ペアの会話はすべて、同年齢クラス内でのものである。年齢別における、各ペアの年長、年少の平均月齢、ペアの月齢差、性別による会話のペア数、3者以上の会話の頻度を表1に示した。

表1 年齢別会話数とペアの平均月齢、ペアの月齢差の平均、および性別によるペア数と3者以上の会話数

年齢ペア	人数	会話数	ペアの平均月齢 (2者間の会話のみ)		ペアの月齢差		性別による会話のペア数			3者以上の会話
			年長の 平均月齢	年少の 平均月齢	月齢差 平均	ペアの月齢 差レンジ	男児—男児	男児—女児	女児—女児	
2歳後半児ペア	19	23	34.2	32.5	1.7	0－3	6	5	12	0
3歳児ペア	26	80	39.1	35.4	3.9	0－8	20	34	13	12
4歳児ペア	34	76	51.9	49.1	4.2	0－11	22	10	6	39
5歳児ペア	30	26	65.3	61.3	4.8	0－11	11	2	0	13
6歳前半児ペア	14	25	75.5	72.6	5.9	0－11	2	5	2	16

### 3. 倫理的配慮

研究を遂行するにあたり、事前に「幼児間の会話の観察」に対する研究主旨を保育園園長に伝え、日常の保育場面を観察するとともに記録を行なうことの承諾を得た。研究依頼書に関しては、園長宛てと保護者宛てを作成して渡した。特に保護者宛ての依頼書に関しては、調査協力は任意であること、承諾しない場合の辞退についても明記した。保護者宛てに関しては保育園の方針により各観察クラスに掲示した。保育観察を承諾しなかった保護者はいなかった。

### 4. 分析方法

#### (1) 分析手続き

分析のための基本単位として会話の始まりは、同じ場にいた2者（もしくは3者以上）のいずれかの子どもが話し始めた発話から「会話開始」と判断した。会話の終わりは、会話に参加している子どもの発話が途切れ、誰も発話をしなくなった時点、もしくは、その後、異なるテーマでの会話が始まった直前を「会話終了」と判断した。逐語記録・録音されたものを転記して、全てカード化し一次資料とした。記録された230エピソードを会

話形態として記載しなおし二次資料とした。二次資料作成の際、幼児ペア内での月齢の採用は最少月齢児が最高月齢児の影響を受けることも予想され、異年齢間における援助効果の影響を考慮し、最高月齢の方を採用した。分析対象は、2者以上の会話も含めた。なお、フィールドノートによる逐語記録の性質上、記録や音声の再現による第三者の場面状況確認が不可能であり、会話開始時

の発話機能の信頼性評定以外の分析は筆者のみで行なった。

## (2) 場面別の分類

二次資料の会話記録を、6つの場面に分類し、その内容を表2に示した。

表2 分析場面と場面内容

場面	場面の内容
設定保育	朝の設定保育での会話（設定保育が始まる前の着座、プール活動中、散歩、設定保育の合間の会話も含む） ※散歩の移動途中は子どもの安全管理による付き添いを優先とし、散歩到着先の公園などで観察を行なった。プール場面の観察は、観察者はプール内に入らず、プールの外から観察を行なったため、主にプールの縁で遊んでいる子どもたちの会話を記録した
食事	食事前後の準備や片づけ、手洗い含む場面の会話
着替え	プールや昼寝前の着替え、昼寝の準備も含む場面の会話 プール後の体拭きから着替えまでの間、午睡前後の着替えの場面をここに含めた
午睡	子どもたちが自分の布団に行き入眠までと、覚醒してから着替え前までの会話 ※入眠前後の場面とし、布団に寝転がって話している会話や午睡終了後の覚醒したあとの着替えに移行するまでの会話などもここに含めた
おやつ	食事場面と同様の分類
自由遊び	朝や夕方の園庭や保育室、ホールでの自由遊び場面での会話（自由遊びの片づけ、昼食後の保育活動の合間の自由遊びも含む）

場面別の会話エピソード数は、設定保育場面 38 エピソード、食事場面 59 エピソード、おやつ場面 20 エピソード、着替え場面 20 エピソード、昼寝場面 9 エピソード、保育室や園庭での自由遊び場面 84 エピソードの計 230 エピソードであった。

## (3) 会話の基本単位とターン数

Bakhtin (1998) の概念を参考にし、1つ以上の言語学的節を含み、小休止などで区切られた、発話者が発する一まとまりのことを「発話」と定義した。また、「会話」は発話者とその受け手の2者（もしくは3者以上）相互間において生み出された一つの発話交換単位であり、「発話の交替が2つ以上やりとりされる状態」と

定義した。さらに、中田 (1990) と小坂 (2001) を参考にし、「turn (ターン)」を「発話の順番 (話順)」として捉え、「一人の話し手が話し始めてから次の話し手が話し始めるまで」もしくは「相互交渉が生起して、話し手から開始された主題が聞き手に向けられた場合」、つまり「発話者 (A) が発話した時点」を「ターン1」としてカウントした。

## (4) 会話の共有情報 (媒介物要因) についての分類

収集された 230 例の会話エピソードについて、筆者 (2023) に依拠して、会話内容の共有情報として媒介物の有無を考慮して以下の a、b の基準に分類し、頻度を算出した。

### 会話の共有情報の分類基準

#### a. 会話の共有情報に媒介物がある場合

会話参加者が相互に見ている (確認している) 事象 (事物) を共有することで会話が成立している場合である。具体的な例は以下のとおりである。

- 1) 事物の取り合い、または事物の受け渡し
- 2) 事物にかかわる依頼 (例: 「○○取って!」など)
- 3) 相手の持っている事物に対して話す場合

- 4) 相手の体の一部について話す場合
- 5) 相手のしている様子を見て話す場合

#### b. 会話の共有情報に媒介物が無い場合

直接の媒介物を主題としない、会話参加者が相互に見ていない（確認していない）事象を共有することで会話が成立している場合である。遊びの誘い掛けや相手への評価、ごっこ遊び（なりきり、ふり遊び）などはここに含めた。具体的な例は以下のとおりである。

- 1) 遊びの誘いかけ（例：「入ってもいいですか？」「いいよ」）
- 2) ごっこ遊び（ふり、役へのなりきり遊び等）
- 3) 相手の動作を見ての意思表示（例：「〇〇やるよ！」「ボクもするー！」）
- 4) 歌遊び、同じフレーズの繰り返し
- 5) 相手そのものに対する評価（例：「〇〇ちゃん嫌い」「いやや」）
- 6) 眼前にない事象に関する依頼（例：「（眼前にない）〇〇取ってきて」）
- 7) 眼前にない事象に関する意思表示（例：「〇〇するー！」）

#### （5）会話開始時の発話機能の分類

Halliday（1985/2001）は、「発話の交換における基本的な役割」に沿って、「与える（giving）」という供与機能と「要求する（demanding）」という要求機能に分

類した。さらに「交換における役割」と「交換されるもの」の2種類を組み合わせた「提供（offer）」「命令（command）」「陳述（statement）」「質問（question）」という4つの基本的な発話機能を設定した（表3）。

表3 交換されるものと交換における役割としての発話機能分類（Halliday, 1985）

会話開始時の発話機能				
交換されるもの	事物／行為		情報	
交換における役割	要求	供与	要求	供与
発話機能	命令	提供	質問	陳述

本研究の会話開始時の発話機能を、この Halliday（1985/2001）の4つの発話機能に分類し、その4つに分類が困難であったものは「評定不能」とした。なお、設定した会話開始時の発話機能の分類基準に基づいて、心理研究法を学んだもう一人の観察者と筆者の2名で、会話開始時の発話機能の分類基準について評定者間一致の作業を行なった結果、一致率は90.4%（208例が一致）であった。一致した208例のうち3例は両者ともに「評定不能」であった。不一致の22例については、データ

収集した際の状況を掌握している参加観察者であった筆者の評定を採用した。なお、不一致の22例のうち、筆者は評定したがもう1名の評定者は「評定不能」としたものが4例あり、残りの18例については筆者と評定者の評定が食い違ったものである。

#### （6）会話エピソードの例

以上の分析基準に基づいた、具体的な会話エピソード例は以下のとおりである。

##### 会話エピソード例

- ・ 幼児の表記：会話エピソードに記載された幼児名はすべて仮名としている。
- ・ メンバーごとの発話：コウ①、リク①と示す。  
○付の数字は各児における発話順を示す。
- ・ ターンの順番：〈ターン1〉〈ターン2〉のように〈 〉で示す。3名以上の会話は、ターンの宛先が複数になるため、ターン数はカウントしない。
- ・ 行動描写および発話意図が通じるよう補足した部分：発話内および発話間において括弧で示す。

食事場面〔5歳後半ペア〕コウ（5：9）（男児）とリク（5：11）（男児）の会話  
食事の時間に、地球や宇宙の話で盛り上がっているコウとリク。



コウ①：「でもさあ、もしかしてさあ、本当に地震と台風来たら本当に地震が来たらむっちゃ揺れる」・・・〈ターン1〉  
 リク①：「ねえ、ねえ地球って宝石みたいなやつ（おそらく隕石のこと）が降ってきたらみんな吹っ飛ばんやで」・・・  
 〈ターン2〉  
 コウ②：「宇宙か？」「それやったら天の川違う？」（地球、宇宙の知識を整理している）（地球、宇宙、天の川、知って  
 いる単語を羅列する）・・・〈ターン3〉  
 リク②：「こうやって、上からしゅーっと地球が回ってる草の所に当たったら...草の所に当たったら台風になるで」・・・  
 〈ターン4〉  
 コウ③：「それでみんな怪我するかもしれん」・・・〈ターン5〉  
 リク③：「宝石（隕石のこと）みたいなやつ」「地球は回ってんのに、何でここ（自分たちの立っている所）は、回って  
 へんのやろ？」・・・〈ターン6〉  
 コウ④：「だって、分からへんやんか」「地球って回ってんねんで」「地球って回ってんねんで。回ってるけど今、わか  
 らへんねんで」・・・〈ターン7〉  
 リク④：「地球って広いで」・・・〈ターン8〉  
 コウ⑤：「ねえ、リク。地球って外から見たら青い所が海に見えるけど。それって海違うねんで。だって海じゃないと  
 ころも青いところやで」・・・〈ターン9〉

【分析結果コウ①～コウ⑤】

- （1）ターン数：ターン数は9つ。
- （2）会話の共有情報：眼前の事物を共有しない会話である。
- （3）会話開始時の発話：交換における役割が「供与」、交換されるものが「情報」であり、「陳述」の発話である。

（7）会話エピソード分析

量的分析により有意差が出た項目の会話の一例を挙げることで、会話内で話された発話内容、発話意図、会話の流れなどの会話の詳細を捉えることとする。

（8）統計解析

各分析指標の出現頻度についてカイ二乗検定と期待度数が5以下のセルがある場合はFisherの直接確率法による検定を行なった。すべての統計の有意水準は5%とした。検定は統計解析ソフトIBM SPSS Exact Tests ver.26.0とIBM SPSS Statistics Standard Grad Pack ver.29を用いた。

ソード、5歳前半は18エピソード、5歳後半は8エピソード、6歳前半は25エピソードの計230エピソードであった。各年齢クラスでの参加観察により、全て同じクラスの幼児で構成されていたが、幼児ペア内の最大月齢差は11か月、最小月齢差は0か月（同月齢）であった。7か月以上の月齢差のある幼児ペアは3歳以降にみられ、徐々に月齢差の大きい幼児ペアの会話がみられた。2歳後半群では、幼児間の会話観察開始月齢が2歳後半であり、同クラス内で観察しているため、実質的に2歳後半群はペアの月齢差が6か月を越えることはなく、月齢差は3か月以下であった。3歳群では、月齢差8か月までのペアが収集され、4歳以降、月齢差11か月のペアがみられた。

IV 結果

1. 年齢別の会話エピソード数

観察された会話の年齢別会話数は2歳後半が23エピソード、3歳前半が68エピソード、3歳後半は12エピソード、4歳前半は67エピソード、4歳後半は9エピソード

2. ターン数による分析

（1）年齢による違い

2者間の会話におけるターン数の頻度を表4に示した。

表4 年齢別の成立した会話におけるターンの頻度

年齢	ターン数2	ターン数3	ターン数4	ターン数5	ターン数6	ターン数7以上
2歳後半	17	2	3	0	1	0
3歳群	47	11	1	1	6	1
4歳群	17	10	3	4	0	4
5歳群	7	1	1	1	0	3
6歳前半群	2	5	1	1	0	0

注) 表内の数字は観察された会話数

収集した会話230エピソードのうち、2者間で会話した150エピソードの内訳を示した。

3者以上の会話はターン数が分類できないため、ターン数を分類していない。

ターン数2とターン数3以上で年齢群での頻度の差を明らかにするために、カイ二乗検定を行なった結果、有意差があった ( $\chi^2 = 10.945$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.001$ )。2, 3

歳はターン数2が多く、4歳以上ではターン数3以上が多いといえる (表5)。

表5 ターンの出現頻度における年齢群比較

年齢		ターン数2	ターン数3以上
2, 3歳	度数	64	26
	割合 (%)	71.1	28.9
4歳以上	度数	26	34
	割合 (%)	43.3	56.7

注) 表内の度数は観察された会話数

量的分析により明らかにされた結果について、2, 3歳と4歳以上の会話エピソードの内容からみてる

(表6、表7)。

#### ① 2歳後半から3歳のターン2の会話エピソード

表6 エピソード① 設定保育のプール場面〔2歳後半と3歳前半ペア〕

[モモ (2:7) (女児) とソウ (3:0) (男児) のペア]

プールでの遊び時間にソウが持っていたジョウロでモモを叩いてしまう。叩かれたモモは嫌がるが、ソウが叩いた理由を述べている。

モモ①: (ソウにジョウロで叩かれて) 「やめて!」・・・〈ターン1〉

ソウ①: 「モモちゃんがボンッてしたからやで」・・・〈ターン2〉

エピソード①の2歳後半児同士の会話では、ソウに叩かれたモモが拒否をしている。モモの拒否によってソウ

が叩いた理由を述べるという2つのターンで会話が終了している。

#### ② 4歳児同士のターン3以上の会話エピソード

表7 エピソード② 食事場面〔4歳前半ペア〕

[カンタロウ (4:0) (男児) とユウ (4:2) (男児) のペア]

食事のあと、カンタロウが着替えに保育室に戻ってくる。ユウは先に食事を済ませて既に午睡のパジャマに着替えている。カンタロウはユウに、食事後に遊ぼうと思っていたお気に入りのタイヤ付きのブロックを取っておいてもらうよう依頼する。タイヤ付きのブロックは人気が高く、いつも食事後の自由遊び時間では、早いもの勝ちで子どもたちが使用している。

カンタロウ①：「ねえねえ、ユウ。(ブロックの)車、全部出しておいて」・・・〈ターン1〉  
 ユウ①：「いいよ。ユウ、車出しといてあげるし、その間にカンタロウ、着替えといて」・・・〈ターン2〉  
 カンタロウ②：「大きいのやー」「大きいの(取っておいて)お願い！」・・・〈ターン3〉  
 ユウ②：「大きいのも？」・・・〈ターン4〉  
 カンタロウ③：「うん」「んーで、(ブロックの)お人形とか」・・・〈ターン5〉  
 ユウ③：「あ、あった。(ブロックの)お人形」・・・〈ターン6〉  
 カンタロウ④：「ありがとう」・・・〈ターン7〉  
 ユウ④：(近くにいる友だちに声掛けて)「お人形、お人形探して」  
 (カンタロウに向かって見つかったブロックを見せて)「変なお人形やで」・・・〈ターン8〉  
 カンタロウ⑤：「変なお人形いらん(必要ない、の意)」・・・〈ターン9〉

エピソード②の4歳前半児ペアでは、カンタロウの要求に対してそれに沿うようユウがカンタロウに確認しながら会話が進んでいる。カンタロウがどのような玩具を必要としているか、何度もやりとりする中でその情報を集めながら要求に合うものを探しており、やり取りに応じて、ターン数も長くなっている。

## (2) 会話の共有情報

会話の共有情報(媒介物有無)におけるターン数の出現頻度を表8に示した。媒介物有無でターン数2とそれ以上の出現頻度に違いがあるか否かを明らかにするために、カイ二乗検定を行なった結果、有意差はなかった( $\chi^2 = 0.022$ ,  $df = 1$ ,  $p = 0.883$ )。

表8 会話の共有情報(媒介物有無)別のターン数2と3以上の出現頻度

		媒介物あり	媒介物無し
ターン2	度数	55	35
	割合(%)	61.1	38.9
ターン3以上	度数	38	22
	割合(%)	63.3	36.7

注) 表内の度数は観察された会話数

## (3) 会話開始時の発話機能

会話開始時の発話機能別のターン数2と3以上の出現頻度を表9に示した。期待度数が5以下のセルがあるた

め、Fisherの直接確率法による検定を行なったところ、有意差はなかった( $p = 0.279$ )。

表9 会話開始時の発話機能別のターン数2と3以上の出現頻度

ターン数	会話開始時の発話機能				
	交換されるもの	事物／行為		情報	
	交換における役割	要求	供与	要求	供与
	発話機能	命令	提供	質問	陳述
ターン2	度数	19	1	14	56
	割合(%)	21.1	1.1	15.6	62.2
ターン3以上	度数	6	2	9	40
	割合(%)	10.5	3.5	15.8	70.2

注) 表内の度数は観察された会話数  
 評定不能であった開始発話の会話3つは除外した。

### 3. 会話内の共有情報として媒介物の有無の分析

#### (1) 年齢による違い

会話内の共有情報としての媒介物有無による出現頻度を表10に示した。カイ二乗検定を行なったところ、年

齢群で有意差があった ( $\chi^2 = 17.836, df = 1, p < 0.001$ )。2, 3歳では媒介物ありの会話が多く、4歳以上では媒介物無しの会話がが多いといえる。

表10 会話の共有情報の出現頻度による年齢群比較

年齢		媒介物あり	媒介物無し
2, 3歳	度数	73	29
	割合 (%)	71.6	28.4
4歳以上	度数	56	72
	割合 (%)	43.8	56.3

注) 表内の度数は観察された会話数

量的分析により明らかにされた結果について、2, 3歳と4歳以上の会話エピソードの内容から見てみる (表11、表12)。

#### ① 2歳後半から3歳の媒介物ありの会話エピソード

表11 エピソード③ 着替え場面 [2歳後半と3歳前半ペア]

[エミ (2:10) (女児) とコウ (3:4) (男児) のペア]

おやつが終わって、夕方の水遊びプールが終わり、先に着替えていたコウ (3:4) が、自分の棚の前に座ってこれから服を着ようとするエミ (2:10) に話しかける。2人とも着替えながら誰がお迎えに来るのか話している。(オムツを今、履き替えようかどうか) 選択を迷っているエミに、コウが声掛けをしている。

コウ①:「今日、お迎えパパ?」・・・〈ターン1〉

エミ①:「エミちゃん、お母さんがよかったん・・・(「お母さんにお迎え来てほしい」の意)」・・・〈ターン2〉

コウ②:「オムツするか? (いつもお迎えきた時にオムツに替えていることを知っている)」・・・〈ターン3〉

エミ②:「オムツ、お母さんがお迎えの時にしたかったん・・・(「お迎えに来たお母さんにオムツを替えてもらいたい」の意)」・・・〈ターン4〉

コウ③:「じゃ、(オムツは) しまとくか? (「お迎えの時にオムツに履き替えるので、今は必要ないね」の意)」・・・〈ターン5〉

エミ③:「うん」・・・〈ターン6〉

エピソード③では、コウとエミが、オムツという共通の事物を会話の共有情報としている。会話開始時の発話は、交換されるものが情報であり、交換における役割は(答えの) 要求であり、質問に分類される。コウは母のお迎え時にオムツに着替えることをエミが望んでいるという情報を、エミの発話から得ている。エミが父のお迎えよりも母のお迎えを期待しており、選択を迷っているエミに対して、「お迎え時に母に着替えさせてもらいたい」というエミの思いに合わせてオムツを仕舞うようア

ドバイスするなど、眼前にある事物を共有しながら協力をしている。また、オムツを仕舞うという選択を援助した協力を通して、コウはエミが抱いている思いを共有したと考えられる。2, 3歳の低年齢児の協力において事物の共有が支えとなっている。同じ保育園で同じ活動を経験していることで、既に相手の情報を得ており、そのことで相手のしたいことに合わせて協力している姿が示された。



## ② 5歳後半ペアの媒介物無しの会話エピソード

表12 エピソード④ 食事場面〔5歳後半ペア〕

〔ケイ（5：9）（男児）とリョウ（5：11）（男児）のペア〕

食事時間にケイとリョウがセミやコオロギについて話している。

ケイ①：「冬にセミがいたら？（「冬にセミが居る設定ってどう思う？」の意）・・・〈ターン1〉

リョウ①：「ねえ、夏にコオロギが居たらむっちゃすごいで」・・・〈ターン2〉

ケイ②：「いるで」・・・〈ターン3〉

リョウ②：「いるけど、（本当にいたとしたら）すごいで」「だって、コオロギって秋に出るもん」「だって、コオロギって枯れ葉好きやもん」・・・〈ターン4〉

エピソード④では、コオロギの生態について話している5歳後半児同士の会話である。会話開始時の発話は、情報を交換し、（答えを）要求しているため、質問に分類した。「冬に居ないはずのセミがいたらどう思う？」というケイの問いかけを受けて、セミではなく、自分の知っているコオロギにテーマを変えてリョウに問いかける。2人が共有しているのは「コオロギ」に対する情報である。お互い意見を交わしながら、コオロギの生態の知識について整理しており、会話の共有情報としてイ

メージが用いられている。

## （2）会話開始時の発話機能

会話開始時の発話機能（交換される物・交換役割・発話機能）の会話の共有情報における出現頻度を表13に示した。期待度数が5以下のセルがあるため、Fisherの直接確率検定を行なったところ、有意差はなかった（ $p = 0.415$ ）。

表13 会話開始時の発話機能の出現頻度による会話の共有情報の比較

会話の共有情報	会話開始時の発話機能				
	交換されるもの	事物／行為		情報	
	交換における役割	要求	供与	要求	供与
	発話機能	命令	提供	質問	陳述
媒介物あり	度数	22	4	21	80
	割合（％）	17.3	3.1	16.5	63.0
媒介物なし	度数	18	0	17	65
	割合（％）	18.0	0.0	17.0	65.0

注）表内の度数は観察された会話数  
 評定不能であった開始発話の会話3つは除外した。

## 4. 年齢別にみた会話開始時の発話機能

会話開始時の発話機能（交換される物・交換役割・発話機能）の年齢群別における出現頻度を表14に示した。期待度数が5以下のセルがあるため、Fisherの直接確率検定を行なったところ、有意な差があった（ $p =$

0.004）。2, 3歳では4歳以上と比較して命令が多く、4歳以上では陳述が多い、という偏りがみられた。

量的分析で2歳児、3歳児で有意に高い頻度であった「命令」の開始発話の会話エピソードを以下に示した（表15）。

表 14 会話開始時の発話機能の出現頻度による年齢群比較

年齢	会話開始時の発話機能				
	交換されるもの	事物／行為		情報	
	交換における役割	要求	供与	要求	供与
	発話機能	命令	提供	質問	陳述
2 歳、3 歳	度数	25	4	15	56
	割合（％）	25.0	4.0	15.0	56.0
4 歳以上	度数	15	0	23	89
	割合（％）	11.8	0.0	18.1	70.1

注) 表内の度数は観察された会話数  
 評定不能であった開始発話の会話 3 つは除外した。

### ① 2 歳児、3 歳児の命令の開始発話エピソード

表 15 エピソード⑤ 設定保育場面〔2 歳後半ペア〕

〔アユ（2：8）（女児）とミズ（2：11）（女児）のペア〕

設定保育のプール遊びで、ミズとアユがプールの端で遊んでいる。アユが自分の持っていたペットボトルをミズに貸してあげた時にひと声掛ける。

アユ①：「アユちゃんにまた（このペットボトルを）返してや」・・・〈ターン 1〉

ミズ①：「うん」・・・〈ターン 2〉

エピソード⑤の 2 歳後半児同士の会話では、事物の受け渡しをしている。会話開始時の発話は、Halliday (1985/2001) の分類に沿って、事物を交換し相手の行為を要求しているため、「命令」に分類される。アユは貸してあげるものを後で返してもらうようミズに要求しており、ミズはそれに対して一語で承諾している。要求

に対して承諾、という「要求－承諾」の発話の隣接ペアが成立しており、この隣接ペアで会話が終了している。

### ② 5 歳後半児の陳述の開始発話エピソード

量的分析で 4 歳以上に多い結果が出た「陳述」の開始発話のエピソードを以下に示した（表 16）。

表 16 エピソード⑥ 食事場面〔5 歳後半ペア〕

〔ケイ（5：9）（男児）とリョウ（5：11）（男児）、アユ（5：9）の 3 人組〕

食事中に過去の経験を想起しながら、お互いの共通経験について振り返っている。

ケイ①：「ケイ、リョウのお家、知ってるで」

リョウ①：「（僕のうちに遊びに来て）夜頃に帰ったよね」

アユ①：「夕方に（お家に行ったよね）」

ケイ②：「だってなあ、前、（一緒にお家で）ドラえもん（の番組）見たもん」

アユ②：「夜頃に帰ったよね」

ケイ③：（リョウに向かって）「あの時（のこと）、覚えてる？」

アユ③：「何歳の時（だったっけ）？」

リョウ②：「ボクたちがちょうど、5 歳ぐらいの時」

ケイ④：「4 歳（の時）とちがうの？」

（ここで会話が途切れる）

エピソード⑥の 5 歳後半児同士の会話では、自分たちがともに経験した過去の出来事を想起しながら、リョウの家に行って遊んだ経験を共有している。会話開始時の発話は、Halliday (1985/2001) の分類に沿って、情報

を交換し相手に情報を与える役割をしているため、「陳述」に分類される。リョウの「ケイの家を知っている」という発言をきっかけに「一緒にケイの家で遊んだ経験」を会話の主題として共有している。リョウやアユが

その時間帯、ケイがその時に遊んだ内容を補足し、さらにその経験をした年齢について振り返っている。これらの共通体験を主題とした会話は、お互いがことばを用いて説明することによってテーマが共有されている。

## V 考察

表 17 年齢群比較による会話特徴

	2歳後半、3歳群	4歳以降群
ターン数	ターン数2が多い	ターン数3以上が多い
会話の共有情報	媒介物ありの会話が多い (人や事物を共有)	媒介物無しの会話が多い (イメージを共有)
会話の開始発話	命令が多い (交換されるものは事物／行為である)	陳述が多い (交換されるものは情報である)

ターン数については、共通事物を用いた課題場面（筆者, 2023）に限らず、本研究の日常の保育場面でも2, 3歳では、発話者への応答に留まるターン数2が、4歳以上ではターン数3以上が多く、2ターン以上の比較的最長い発話連鎖が4歳児において増加したという深田ら（1999）の結果と同様の傾向がみられた。おおむね2歳児の会話は、発話者の言動に反応するか相手からの応答を求めるかのどちらかである傾向があり（Pan & Snow, 1999）、相手の発話に返答し、相手の返答を求めることを同時にするような転換（turnabout）が稀であるように（Kaye & Charney, 1980; Kaye & Charney, 1981）、自分の興味内での会話の主題導入を行なうものの、同じ話題を維持させるには困難さが残る（Bernstein & Tiegerman, 1993/1994）。

会話の共有情報では、4歳以降にはイメージを共有情報として会話が成立しており、ターン数も増加する結果が得られたことから、大人が介入しなくても子ども同士でやりとりができるといえる。

会話開始時の発話では、2, 3歳群では命令が多くみられ、4歳群では陳述が多くみられた。

子どもたちの家庭環境はそれぞれ異なり、言語環境のベースも異なっているであろう。しかし、同じ保育園で共通の生活体験をすることによって、お互いが共有する共通基盤は形作られていく。子どもはことばを用いることによって相手のことばから、相手のことをより理解でき、何とか相手の意図を汲み取ろうとし（エピソード③）、相手の意図に合わせた対応をしようとする。Tomasello（2023）は、ヒトに特有な協力的思考スキルのプロセスは、1歳頃に発達する共同注意に始まり、2歳頃の協力的コミュニケーションから、3, 4歳の言語

ターン数、会話の共有機能、会話の開始機能の発達変化について本研究の分析結果を表17に示した。2歳から6歳頃の就学前の子ども同士の会話は、4歳台から、お互いに共有するものの質が変化した。2, 3歳は事物を支えにしてやりとりすることが中心であり、4歳以降はイメージを支えとしてやりとりするようになる。

的コミュニケーションを経て5歳以降に視点の協応としての協力的思考を獲得していく、と述べている。足場かけのない子ども同士の会話の質的变化は、他者との協力的思考を獲得する重要な要素の一つである。

子どもは友だちと相互作用し、相手と協力的に意思決定をしたり、共同的問題解決に取り組むことにより多視点的な概念も構築し、社会的活動や相互作用の基礎も学んでいる（Garvey, 1984/1987）。

子どもは幼少期から、他者を援助しようとし、他者と共有しようとする心理的な基礎過程を持ち合わせている。このように、日常の保育場面では、常時、大人が介在しなくても、相手を援助したり、お互いに同様の感情を共有しあったり、お互いを認め合ったり、さまざまな形で子ども同士はコミュニケーションを深めている。この過程で言語が重要な役割を果たしており、子ども同士のかかわりで共有されることばをもとに、子どもの世界は豊かに広がっていくといえる。

## VI 本研究の意義と限界

本研究は、日常の保育場面における子どもたち同士の自発的な会話を収集し、ことばを用いたコミュニケーションの形成の様相を会話特徴の面から考察した点において意義がある。また、研究結果として、2, 3歳児では、共通の事物を共有するなど、具体的事物・行為の支えがないと子ども同士での会話が継続しにくい、ことばによるイメージをする力が育ってくる4歳以降ではそれらの支えがなくても会話が継続する可能性があるということを明らかにした点において意義がある。

本研究の限界として、発話のテキストだけでは発話者

の意図は限定的にしか捉えることができなかった。信頼性評定の作業では筆者と評定者間で解釈の不一致が生じたが、それは映像記録もなく文字に書き起こされたデータだけを分析していたからである。場面状況や対象者の個性や人間関係などを掌握していることが会話の文脈を読み取るうえで重要であることが示唆された。本研究では筆者が保育場面で実施した参加観察による記録の分析のため、記録されていること以外は分析できなかった。今後、録画撮影した保育場面での子ども同士の会話について、非言語行動を含めた分析を行ない、幼児間の会話の発達について明らかにする必要がある。

## 文献

- Bakhtin, M. (1998). ことば対話テキスト. (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). (pp.136-137, pp.162-163). 新時代社.
- Bernstein, D. & Tiegerman, E. (1994). 子どもの言語とコミュニケーション：発達と評価 (池弘子・山根律子・緒方明子, 訳). (pp.150-153). 東信堂. (Bernstein, D. & Tiegerman, E. (1993). *Language and communication disorders in children*. (pp.118-120). Macmillan, Inc.)
- 江口純代 (1974). 幼児のコミュニケーション行動の発達－遊び場面における2幼児間の相互的言語伝達の分析－. 人文論究, 34, 15-38.
- 福原真知子・Ivey, A. E.・Ivey, M. B. (2004). マイクロウンセリングの理論と実践. 風間書房.
- 深田昭三・倉盛美穂子・小坂圭子・石井史子・横山順一 (1999). 幼児における会話の維持－コミュニケーション連鎖の分析－. 発達心理学研究, 10 (3), 220-229.
- Garvey, C. (1987). 子どもの会話－“おしゃべり”にみるこころの世界－ (柏木恵子・日笠摩子, 訳). (pp.10-11, pp.12-15). サイエンス社. (Garvey, C. (1984). Children's talk. In Bruner, J., Cole, M., & Lloyd, B. (Eds.), *The Developing Child*. (pp.8, pp.8-11). William Collins.)
- Grice, H. P. (1975). Logic and Conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan. (Eds.), *Syntax and Semantics*, Vol. 3, *Speech Acts* (pp.41-58). New York Academic Press.
- Halliday, M. A. K. (2001). 機能文法概説－ハリディ理論への誘い. (山口登・寛寿雄, 訳). (pp.101-155). くろしお出版. (Halliday, M. A. K. (1985). *An Introduction to Functional Grammar*. (pp.68-100). London: Edward Arnold.)
- Kaye, K. & Charney, R. (1980). How mothers maintain “dialogue” with two-year-olds. In D. R. Olsen (Ed.), *The social foundations of Language and thought: Essays in honor of Jerome S. Bruner* (pp.211-230). NY: W. W. Norton.
- Kaye, K. & Charney, R. (1981). Conversational asymmetry between mothers and children. *Journal of Child Language*, 8, 35-50.
- 木下孝司 (2002). ミスコミュニケーション状況における2歳児の他者視点に関する理解. 神戸大学発達科学部研究紀要, 10 (1), 25-34.
- 小坂美鶴 (2001). 3歳児の仲間同士の会話特徴について：言語使用と発話機能の分析からの検討. 聴能言語学研究, 18 (3), 154-162.
- 中田智子 (1990). 発話の特徴記述について－単位としての move と分析の観点－. 日本語学, 9 (11), 112-118. 明治書院.
- Pan, B. A. & Snow C. E. (1999). The development of conversational and discourse skills. In M. Barrett (ed.), *Language of Development* (pp.229-249). Hove: Psychology Press.
- Rheingold, H. L. (1982). Little children's participation in the work of adults, a nascent prosocial behavior. *Child Development*, 53 (1), 114-125.
- Schegloff & Sacks. (1995). 会話はどのように終了されるのか. 日常性の解剖学－知と会話. (北澤裕・西阪仰, 訳). (pp.175-241). マルジュ社. (Schegloff & Sacks. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.)
- Tomasello, M. (2023). 進化・文化と発達心理学－人の認知と社会性の個体発生を探る. (大藪泰, 訳). (pp.178-180). 丸善出版.
- 山本弥栄子. (2023). 積み木遊び場面での幼児間の会話に関する研究－イメージ共有についての2歳と4歳の比較－. 大阪総合保育大学紀要第17号, 151-165.

## 謝辞

本論文執筆にあたり、ご指導くださいました大阪総合保育大学大学院 小椋たみ子教授と査読の先生方に心より感謝申し上げます。また、分類基準の評定にあたり土生川雄彦氏（元関西学院大学大学院生）には、ご援助、ご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

## 付記

本研究に関して、開示すべき利益相反はありません。

## Developmental Characteristics of Conversations among Young Children at the Daily Nursery Setting

Yaeko Yamamoto

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

In order to clarify the characteristics of conversations between young children, this study collected free conversations in daily childcare situations among young children from 2.5 to 6.5 years old. The observed scenes were during set-up, meals, changing clothes, naps, snacks, and free-play. Statistical tests of different age groups were conducted for the number of turns of utterance, function of the utterance at the beginning of the conversation and contents of information shared in the collected 230 conversations. The results showed that two-turn conversations, and conversations in which visible objects were discussed were more common in the 2- and 3-year-old groups. In contrast, turn 3 and above speech alternations and image-sharing conversations were more common in the group of 4-year-olds and older. The first utterances at the start of conversations were “commands” in the 2- and 3-year-old groups, and “statements” in the 4-year-old group. The developmental ability to form these types of conversations among young children seems to appear in the 4-year-old and older groups.

**Key words :** peer talk, turns of speech, conversation sharing information,  
function of the first utterance



